

花の歌歳時記

前田康子

福永武彦の『玩草亭百花譜』という本がある。信濃^{しなの}追分^{おきわけ}の草花を写生した画文集である。初めの頃、武彦はミゾソバとママコノシリヌグイを間違えてスケッチしていた。どちらも夏から秋にかけて咲く、ピンク色の花である。花がこんぺいとうに似ていてかわいいが、ママコノシリヌグイの方には、茎に細かな棘^{とげ}があり、摘むことも難しい。

それに気づいた後、武彦は葉や花を丁寧に調べ、どのように違うのか詳しく書き記している。『玩草亭百花譜』は自分だけの植物図鑑なのだと言っている。

近所の川にも、どっとミゾソバが咲いている。ところが数年前、川に咲いている草花で、その汚れ具合がわかるという研究発表がされた。それによると、ミゾソバの生えている川は、少し汚いランクだという。がっかりしたが、やはりそうかという気もしていた。ミゾソバが咲き終わる頃、川の色は、秋の色に変わる。冷たい透明感のある色になる。



絵・キキヨウ／小柳吉次

鶏頭

鶏頭の花を母が教えてくれた時のことを、時々思い出す。幼かったので鶏頭を「毛糸」に似た言葉と思い込んでいた。母はよく編み物をしていたから、鶏頭のふさふさした花を見ると、暖かいセーターの肌触りを思い出した。あらためて見ると、鶏頭の花は実に変わった形をしている。しかし江戸時代頃には、花よりも葉を茹でて食用にしていたという。また、万葉の時代には染料にも使ったらしい。

鶏頭はあまりに赤しよわが狂ふきざしにもあるかあまりに赤しよ

岡本かの子『浴身』

鶏頭のぼつてりとした赤さはひとを、危うくさせてしまうかもしれない。とくに夕日を浴びて咲いている鶏頭は、初秋の寂しさの極まりである。

ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の
花黄なる庭さき

北原白秋『桐の花』

鶏頭の歌の代表歌であろう。この鶏頭は黄色の花である。白秋は詩集『思ひ出』の中にも鶏頭の詩を書いているが、その鶏頭も黄色い色である。なぜ赤い色の鶏頭にしなかった

か気になるところである。

つり草の二つを占めて車中より鶏頭の紅
き花をなつかしむ

吉野昌夫『遠き人近き人』

電車の中から、ふっと鶏頭の花が見えた。二つの吊革を一つの手を持っているのか。立ったまま、窓の方に首だけ伸ばしている。畑の隅や、農家の庭先に何気なく植えられている鶏頭が、子供の頃の眼差しに自分を戻して

くれる。

こそり立つふ厚き鶏頭に手触れたり君を
知り君のみを知り一生足る

河野裕子『歳月』

植えられている鶏頭には、花が大きく育つものもあれば、貧弱にしか育たなかったものもある。分厚い鶏頭に手が触れたとき、満たされた思いが作者の胸に込み上げてきた。

けいとう 鶏頭



蓼

蓼の花は子供の頃、茎からしごいて取ってよく遊んだ。つぶつぶとした感触が、おもしろくてままごとの材料にしていたのだろう。蓼にはいろいろな種類があるが、野にある小さい種類は、葉が赤く色づいて草紅葉にな

る。その色もまたとてもきれいだ。また大毛蓼おおけだといってとても大きな蓼があり、色鮮やかで見事である。

たでの花ゆふべの風にゆられをり人の憂は人のものなる

佐佐木信綱ささきのぶ『瀬の音』

耕作を放棄したれば湿性地あかのまんまの一面に咲く

時田則雄ときだのりお『北方論』

あかのまんまは犬蓼のことである。粒々とした花を赤飯にたとえて子供が遊んだところからそう呼ばれている。この歌では、耕作をやめた畑一面に咲いたという。作者は北海道で農場を経営している。土に密着した短歌である。

あきらめのつきし心に見てみたり風ふくみつつ淡き花蓼

石川不二子いしかわふじこ『牧歌』

花蓼は犬蓼よりも色の薄い花をつける種類である。

「蓼食う虫も好き好き」と、蓼の葉の辛さからそのようなことわざが生まれたが、蓼の花の寂しい色は、秋の野に欠かせない色だと思う。

たで
蓼

鳳仙花

鳳仙花は、小学校の庭にたくさん植えられていたのを憶えている。夏休みに育てた朝顔にも、種が実り始めた横に、さまざまな色の鳳仙花の、やわらかい花が咲いていた。

鳳仙花の面白さは種が飛び散ることである。

葦やカタバミの種も同じように飛び散る。あんなに小さい種なのに、顔に当たったら痛さを感じるほど元気がいい。

鳳仙花くればなる零れこぼるれど炭団まろめて余念なし女

島木赤彦 切火

炭団とは「木炭、石炭の粉末にふのりなどをまぜ、球状に固めて乾かしたもの」とある。

女は熱心に、これからの寒さに向けて用意しているのだらう。鳳仙花は野分けに散ってしまった。ぽっかりとした寂しさのある歌。

猫が身につけて運びしこぼれ種ほうせん花はやこの年も咲く、

松村英一 樹氷と氷壁

猫の身体について運ばれてきた種が、芽を出し、その鳳仙花が今年も咲いたという。ほのぼのした歌。作者が、七十年代に詠んだ歌で、これは生前最後の歌集となった。

鳳仙花いつとしもなく終りある庭に銅貨をひとつ拾ひし

佐藤佐太郎 群丘

拾った銅貨は秋の風に冷えているのかも知れない。指先の感じが伝わってくる。手火花が終わるように、鳳仙花も静かに散り、終わってしまった。

まえだ・やすこ 「塔」 会員



かほうせん
鳳仙花